

手を同時に緊縛する。

そして、首にも別のロープを巻いた。

「あッ、助けて呉れッ！」

清七は叫んだ。

「騒ぐな。殺しはせぬ」

辰彦は、顎をしゃくった。

清七が連れて行かれたのは、当時ではまだ珍しかったコンクリートの、浄化便槽のそばである。

鉄製の丸い蓋がとられた。

「さあ、この中へ入れ！」

男たちは叫んだ。

清七は、殺されるよりはましだ……と思ったのか、観念したように、穴から飛び降りたものだ。

冷たいものが、下半身を包んだ。

それと同時に、強烈なアンモニア臭が、鼻を撲つ。

「二日間、その中に入ってるんだ。そうしたら助けだしてやる」

男たちは、そう云って、首のロープの先をどこかに結わえ、鉄蓋をして去って行く。